


「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 26 年 月 日	
所属部局・職	霊長類研究所・修士課程学生
氏名	川口ゆり

<b>1. 派遣国・場所</b> (〇〇国、〇〇地域)
原子炉実験所・瀬戸臨界実験所・京都市動物園・生態学研究センター・霊長類研究所・ニホンモンキーセンター
<b>2. 研究課題名</b> (〇〇の調査、および〇〇での実験)
インターラボ
<b>3. 派遣期間</b> (本邦出発から帰国まで)
平成 26 年 4 月 4 日 ~ 平成 26 年 4 月 9 日 (6 日間)
<b>4. 主な受入機関及び受入研究者</b> (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
京都大学理学研究科生物科学専攻
<b>5. 所期の目的の遂行状況及び成果</b> (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
京都大学理学研究科生物科学専攻にはミクロからマクロまで様々な分野があるが、他の研究室でどのような研究がおこなわれているのかを知る機会はありません。今回、インターラボを通して、下記のような日程で多様な研究の場に触れることができたのでここに報告する。
(日程) 4/4 オリエンテーション、懇親会(京都泊) 4/5 瀬戸臨界実験所(白浜泊) 4/6 原子炉(京都泊) (4/7 入学式) 4/8 京都市動物園、生態学研究センター(京都泊) 4/9 霊長類研究所、日本モンキーセンター
●4/5 瀬戸臨界実験所 今回の行程の中で最も印象的だったのは、瀬戸臨界実験所であった。初めに実験所で行われている研究についてのレクチャーがあり、その後、班に分かれて実験所内や京都大学白浜水族館を見学した。我々の班を案内して下さったのは久保田先生であったが、先生は実験所の施設見学だけでなく浜辺を歩きながら打ち上げられていた魚の死骸やイカの甲など、なんでも解説して下さった。水族館でも各々の生物について教えて頂き、惹きこまれた。閉館までほとんど時間がなかったのが惜しかった。また、ベニクラゲの魅力を広めるべくご自身で作られた歌を熱唱される姿はベニクラゲに対する情熱をひしひしと感じた。研究を行いその成果を広く一般の方も含めて伝えていくためには、まず研究者自身が研究対象に対して熱意をもって接し、誰にでもその魅力を語れるくらいでなければならぬと感じた。例えば、「不老不死」のクラゲや「早死に」のクラゲといった言い方をとって、専門外の人の興味を喚起する言葉遣いだと感じた。

浜辺で久保田先生を囲んで

## 「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



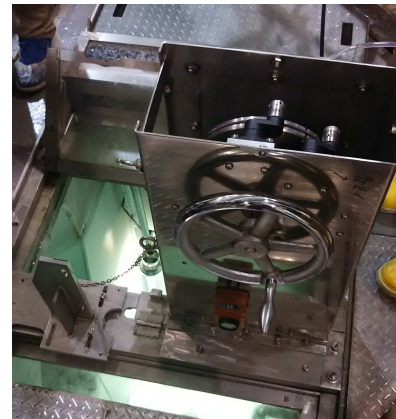
明光風靡な環境に囲まれた瀬戸臨界実験所

### ●4/6 原子炉

今回まわった研究施設の中でも異色だったのは原子炉実験所であった。施設や研究についての講義があったのち、研究用原子炉、ホットラボラトリなどを見学した。震災後、原子炉は稼働していない状態が続いている。



研究用原子炉 (KUR)



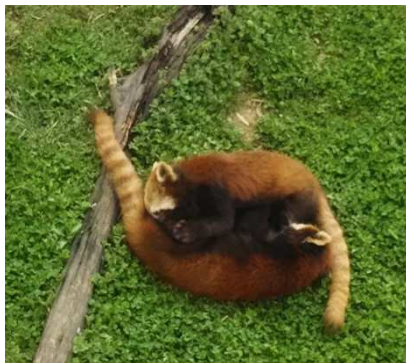
原子炉上部

深い底まで覗くことができる

### ●4/8 京都市動物園、生態学研究センター

京都市動物園は学部生の頃、高大連携プロジェクトのために何度も通った場所であった。しかし、霊長類以外の展示はあまりきちんと見たことがなかったので良い機会であった。参加者の中に京都市動物園でキリンの観察をしていた友人がいたため、彼女にいろいろと話が聞けたのも興味深かった。また、個人的には多くの動物種でオトナメスはあまり遊ぶことがないはずなのに、レッサーパンダの母子がじゃれて遊んでいた姿が印象的だった。

生態学研究所では、そこで行われている研究のレクチャーを受けたのち、安定同位体の研究室、GERの森、シンバイオトロン、圃場を見学した。レクチャーで紹介があった、シジュウカラの警戒声の研究が非常に面白かった。シジュウカラの親は樹洞のヒナに対し捕食者の種類によって異なる警戒声を発し、ヒナはそれに応じて異なる行動をとる、とのことだった。また、安定同位体比からその人の食生活や居住地の情報が読み取れるという研究紹介にも興味をもった。



じゃれて遊ぶレッサーパンダの母子



キリンも間近でみる事ができる

## 「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

### ●4/9 霊長類研究所、日本モンキーセンター

霊長類研究所ではニホンザルの放飼場やチンパンジーのスカイラボでの認知実験、資料室の見学が主であった。チンパンジーの認知実験は私の所属分野の提供であったため、友人に質問されることもあった。答えに詰まるということはなかったが今後、もっと自信を持って研究分野について話せるようになりたいと感じた。

モンキーセンターでは自由見学の後、はく製や骨格標本、また脳や内臓、全身の液浸標本などを見せて頂いた。相当な数の資料が保管されており、頼もしく感じた。解散後もしばらくモンキーセンターの見学を続けた。モンキーセンターではリスザルの島にいらっしゃったセンターの方とお話しし、自分が興味のある「異種の子どもに対する反応」ということについて貴重なお話を伺えたのが収穫であった。



リスザルの島にて

今回のインターラボを通して最も満足していることは、多くの友人を得たことである。実習中、霊長類研究所以外の参加者とも話す機会が多くあった。他愛もない話をするだけでなく、バスでの移動中などに、互いの研究や動物園の在り方などについて意見を交換できたことは大変有意義であった。

また、一方で痛感したのは、自分の専門外の領域に対する知識の欠如であった。常に広い視野を持って研究を行い社会に還元していくには、自分の領域に限らず広く興味を持ち続け、敏感に新たな知見に反応することが不可欠である。PWSの掲げる理念のうちの一つ”All round”はまさにそうした態度を指すのであろう。しかし、私は自分の領域以外に対してあまりにも無知であり、恥ずかしながら講義の途中ついていくのが難しくなることも何度かあった。このインターラボを契機とし、一見自分の関心分野とは離れているように思える研究にも広く目を向ける習慣をつけたいと思う。

### 6. その他 (特記事項など)

本実習はPWSリーディングプログラムの援助を受けて行いました。今回のインターラボを行うにあたって関係して下さった皆様に感謝申し上げます